

《巻頭言》

童謡運動に学ぶ

1872（明治5）年に学制が發布され、近代学校制度が始まり、教科目に「唱歌」も列せられたが、教材も楽器もなく指導できる教師もいなかったことから、「当分之ヲ欠ク」と但し書きがつけられ、すぐには行われなかった。その後音楽取調掛が設置され、教員の養成や教材の開発が進み、今でも歌われている所謂「文部省唱歌」というものが続々と作られることとなった。我々が小さい頃から慣れ親しんだ《かたつむり》や《富士山》が明治時代に作られた曲であると学生に話すと、彼女たちは驚きの声をあげるが、こういった今でも歌い継がれている曲の多くは歌詞も平易で親しみやすく、これからも長く愛されていくのだと思う。しかし、《児島高德》や《水師營の会見》など、歴史上の人物や出来事を歌った歌などは、おしなべて歌詞が難解なうえに教訓的で、子どもの心情によりそったものではなかった。

こういった状況を批判し、1918（大正7）年7月1日に雑誌『赤い鳥』が創刊され、「童謡運動」が始まった。童謡運動は、あたかも修身科の補助教材のようであったそれまでの唱歌教材を否定し、子どもたちに真に芸術的な歌を提供したいという理念のもと展開された。1919（大正8）年の『赤い鳥』童謡第一集の序で鈴木三重吉は、『第一われわれは、根本に於いて、これまで殆、子供たちのための特別な真箇の芸術家を擁し得た例もない。これに対して、たゞひとり「赤い鳥」は、われわれの第一流の作家詩人、作曲家たちを抜いて、子供のために真実なる搜索を寄与する最初の一大運動を導いている。』と、その自負を述べている。

このように、子どもたちに真に芸術的な曲を与えたい、という理想のもとに始まった童謡運動は、その後雑誌『金の船』（後に『金の星』）が創刊され、『赤い鳥』とならんで多くの曲が世に出されるなど興隆を見せるが、結果的には衰退への道をたどることとなる。それは、芸術性を求めるあまり（それが芸術的かどうかはさておき）、子どもには歌にくい曲が多く作られたことや、尋常小学校の訓導であった北村久雄が「童謡音楽の過度な感傷性は悲哀美に耽溺しやすい傾向のある女兒に迎合した曲作りであり飽きられやすく」と指摘したように、レコード童謡の「消費者」に迎合して商業主義に走ったあまり、逆に飽きられてしまったことなどが原因である。

このように、大人たちが理想を求めて始めた童謡運動は、大人たちの勝手な都合によって終わってしまった。子どもたちに必要なものは何か、子どもたちが求めているものは何か、大人の都合でそれらを決めるのではなく、歴史に学び、今を見つめ、未来を考えることによって、それらを探求し続けなければならない。そのために私たちはこれからも研究を深めていく必要がある。『子ども教育研究』がその一助になれば望外の喜びである。

2014年3月

子ども教育学会会長 岡部 芳広